

すごいぞ、日本人のアレンジ力！

中国の古典を学習すると、日本人にはないすばらしさが実感できます。でも、日本人もすばらしいのです。自分たちの作りだしたものではないのに、それを自分たち流にアレンジしてしまう。そんな力が日本人にはありますね。

漢字はその最たるものですよね。漢字のほとんどは中国で生まれました。日本人はそれをあたかも自分たちの言語のように使っています。おまけにひらがなやカタカナを漢字から作ってしまいました。今日は、そんな日本人の力について、漢詩の中から話します。

前回の孟浩然の詩「春暁」の中の一句目（一行目）「春眠不覚暁」を、日本人は「春眠暁を覚えず」と読みます。気付きましたか。読む字の順番が違うでしょ。「不覚暁」の部分は①暁②覚③不（ず）の順番で読みます。下から上に読むのです。

「漢字だけだったら、そんなのわからない」という声が聞こえてきそうだね。だから、「順番を変えて読みますよ」という記号を、文字の左下につけるのです。その記号が「レ」（レ点）です。「レ」が文字の左下に付いていたら、すぐ下の字を先に読んで、読んだらすぐ上の字を読むという約束です。

春眠不_レ覚_レ暁

このようになります。不を読みたいけど、左下にレが付いているから、すぐ下の覚を読みます。でも、覚にもレが付いているので暁から読みます。そして上に上にもどって読んでいきます。さらには、日本語でスムーズに読めるように、送り仮名や「て・に・を・は」をカタカナで右下に書きます。すると、こうなります。

春眠不_レ覚_エ暁_ヲ

「春眠」を読んだ次に「暁を」を読み、最後に「覚えず（不）」が来ます。したがって、「春眠暁を覚えず」となります。今私たちが使っているカタカナは、このように中国の文章や詩を日本人がアレンジして読むために誕生した文字なのです。日本人のアレンジ力ってすごいね。何でも手を加えて自分たちのものにしてしまうからね。

「レ点」のほかに、中学生にマスターしておいてほしい記号「一、二点」というのがあります。これについては、次回話しますね。

（五月十七日分）